

『上海博物館蔵戦國楚竹書研究(四)』「逸詩」における「奴」字の簡略化について

野原将揮

1.

『KOTONOHA』47号では、「待・時」字の合文簡略化について考察した。本稿では「奴」字簡略化について述べたい。『上博楚簡(四)』「逸詩」には「交交鳴鳥」「多薪」の二編が収められている。「逸詩」内にある「奴」字について見てみよう。

第1号簡



……多=薪=莫奴(如)藿葦多=人=莫奴(如)兄

第2号簡



……莫奴(如)同生多=薪=莫奴(如)松梓多=人=莫奴(如)……

以上のように『上博楚簡』「多薪」には計4字の「奴」字が現れる(d,j,s,yが「奴」字である)。この4字で注意したいのがjの字形である。その他3つの字形は「女」と「手」で作るが、このjのみが「女+一点」で表記されているだけである。本稿ではその点について考察していきたい。

2.

jについて、字形は他の3字と多少異なるが、その意味は文意から見ても他の3字と同じであるに違いない。『上博楚簡』整理者は“‘莫奴’讀爲‘莫如’，‘如’字在此解作本義於辭意不諧，當讀作‘如’，‘如」「奴」亦雙聲疊韻字”としている(p.178)。ここで当該字が表す意味と本義は異なっていると言うのが「如」字「奴」字はどのような意味を持っているのだろうか。

説文「如」字

从隨也。从女从口。

「奴」字

奴婢皆古之皐人也。周禮曰其奴男子入于皐隸。女子入于舂藁。从女从又。

以上のように両字の意味は異なる。意味の異なる両字が使われている理由として整理者は「如」「奴」は双声疊韻字であることを指摘している。「如」「奴」の上古音韻地位を見てみよう。「如」の上古聲韻は泥母魚部、中古音韻地位は遇摂日母魚韻三等開口平聲、再構音は鄭張尚芳*/nja/、王力*/nǎ/、B.karlgren*/nǰag/、李方桂*/njag/、董同龢*/ńǰag/、「奴」の上古聲韻は泥母魚部、中古音韻地位は遇摂泥母模韻一等平聲、再構音は鄭張尚芳*/naa/、王力*/na/、B.karlgren*/nâg/、李方桂*/nag/、董同龢*/nâg/である。このように上古音泥母において

中古音日母・泥母の違いが表れており、また/-g/韻尾の再構についてもそれぞれ出入りはあるが両字を双声疊韻字と看做すことは穏当だろう(注1)。もちろんこういった手順を踏まなくとも字形、前後文意や他の文献等々から「莫如」を表していると確認できることはいうまでもない(注2)。

3.

いずれにせよ「莫奴」を「莫如」と解することに異論はないだろう。本稿で問題とするのは、上記の d.j.s.y の「奴」字の内、j 字の字形のみが異なっていることである。前後の文の構造が他と同形でありながら j のみが異なった字形を為している事にどうしても違和感を感じてしまう。なぜ j のみが異なった字形なのか、この字形は一体何を表しているのだろうか。

詩であるからこそ整然とした形式のほう好まれるはずであるのに、一字だけ異なった字形で表記された。それにはひとつの可能性が予想される。それは文字が表記される紙幅と関係があるように思う。本稿で載せた図版では確認することができないが『上海博物館藏戰國楚竹書(四)』(2004)の図版を参照すると j とその前後の文字(莫、兄)が非常に狭い間隔に表記されていることが分かる。結果、「奴」字を表記するスペースがあまり確保できないためやむを得ずして



j のように表記したと予想される。これは単なる予想に過ぎないが、実際に 4 文字中の 1 文

字が  のように表記されていることは何かしら原因があるはずである。ただ単純に当該字のみをこのように表記したとは考え難い。

その理由は如何であれ、こういった字形に東方系文字の特徴が顕著に現れているのではないだろうか。その特徴とは「女+一点」で表されている当該字のその「一点」部分にある。では、この「一点」が何を表しているのかというと、それはまさに「又」字の一部分を為しているのである。「奴」字は本来ならば「女+又」で表記される文字であるけれども、紙幅の関係からか「一点」を「女」の一部分に重ねて表記することで、「女」字とは異なった文字、つまり「女+又」(「奴」字)を表しているのである。これは何琳儀(1989)でいうところの“借用筆画”(「字面の共有」)に当たるものである。

借用筆画(字面の共有): “借用筆画, 是晚周文字中非常有趣的簡化手段。文字的兩個部件由于部分筆画位置靠近, 往往可以共用兩個部件的相同筆画。在戰国文字中, 借用筆画的簡化方式被广泛使用。” (p.209)

司		→		固		→	
官		→		名		→	

他の出土資料における「女」字に「一点」は表記されていない。この「一点」が「女」字と字画を共有することで、「女+手」つまり「奴」字をあらわしている。

𠂔「女」 + 「一点」 → 𠂔「女+手」(奴)

4.

字画を共有することで、紙幅の制限を克服し得たと考えることができる。4字のうちの1文字が略体で表記されることで、目を見た詩としての体系はやや崩れたような感はあるけれども、そこに東方系文字の面白さもある。こういった略体こそが楚系・三晋系を中心とした東方系文字に多く見られる文字変化であり、楚系・三晋系が西に位置する秦系とは異なる字形を持ちえた理由のひとつでもある。略体こそが秦系と東方系とを分かち大きなポイントのひとつだと考えることができる。

注1. 董同龢は同じ諧聲符を持つ幾つかの字について、中古音では泥母(娘母)・日母に分かれる例を挙げている。然/n/・㗎/n/・㗎/n/・㗎/n/、順に中古音日母・娘母・日母・泥母。董同龢(2001)による。

注2. 整理者は「莫如」の例として『詩経』「小雅・鹿鳴之什・常棣」の「常棣之華、鄂不韡韡。凡今之人、莫如兄弟。」等々を挙げている。ちなみにここでは「韡、弟」が脂部微部合韻である。

《参考文献》

- 董同龢『上古音韻表稿』中央研究院歷史語言研究所 1944
 董同龢『漢語音韻学』中華書局 2001
 何琳儀『戦国文字通論(訂補)』中華書局 1989
 李方桂『上古音研究』商務印書館 1980
 馬承源『上海博物館藏戰國楚竹書研究(四)』上海古籍出版社 2004
 王力『詩経韻読』上海古籍出版社 1980
 王力『漢語史稿(重版本)』中華書局 1980
 鄭張尚芳『上古音系』上海教育出版社 2003
 B.karlgren 1954 *COMPENDIUM OF PHONETICS IN ANCIENT AND CHINESE* BMFEA

・「如」

鄭張尚芳	王力	B.karlgren	李方桂	董同龢
*/nja/	*/nǎ/	*/nǎg/	*/njag/	*/ńǎg/

・「奴」

鄭張尚芳	王力	B.karlgren	李方桂	董同龢
*/naa/	*/na/	*/nâg/	*/nag/	*/nâg/